



欧州滞在記

国際東アジア研究センター上級研究員 中村 大輔

欧州で開催された2つの地域科学の年次大会に、2011年8月後半から9月にかけて出席した。1つはスペイン・バルセロナ大学でのThe 51st Annual Congress of European Regional Science Association, もう1つはウェールズ・カーディフで開催されたThe 40th Annual Conference of Regional Science Association International British-Irish Sectionである。

まず、バルセロナにおいては、かつてイリノイ等で時間を共にした各国の研究者と数年振りに再会し、近況を報告し合った。大会での当方の研究発表セッションはスペイン、ルーマニア、スウェーデン、日本と様々な顔ぶれであったが、「長期的に持続可能な都市・地域政策のあり方」を探求するテーマでは皆一致していた。

夕食は近隣の手軽なレストラン等を利用したが、英語の通じない場所がいくつもあった。前任地チリでのスペイン語が多少役立ったが、当初は相手が何を話しているのか分からない点も多く、使わなければ忘れてしまうものと反省していた。しかし、原因はそれだけでなく、カタルーニャ地方特有の言語であったことを後になって知った。カタルーニャ地方では、鉄道駅、バス・トラム停留所、道路標識等、2つの言語がいたる所で併記されている。1つはカタルーニャ語で、もう1つは標準のスペイン語である。ここで鉄道、バス、トラムといった交通機関の話に入りたい。これらはおおむねバルセロナ市交通局によって統合的に管理されており、回数券等も共通化されている。参考までに、その都度切符を購入する場合、中心部のゾーン1は1.45ユーロ（2011年9月現在）なのだ

が、10度数の回数券は8.25ユーロ、即ち1回当たり0.825ユーロで乗車できる大変お得なシステムである。

この回数券は、各駅に設置されている自動券売機スクリーンのT-10をタッチすれば、現金もしくはクレジットカード精算で誰でも簡単に購入することができる。回数券は日本の綴り式とは異なり、1枚のカードに残数が印字される仕組みになっている。2人で使用するときには、改札機に2度挿入すれば2人分支払ったことになる。

なお、トラムやバスはカードを改札機に通さなくても乗車できてしまうのだが、検札時に発覚すると無条件で50ユーロの罰金が科される規則になっているので、忘れないように注意する必要がある。また回数券の磁気を読み取れなくなった場合は、駅係員に再発行をその場でお願いすることができる。筆者は回数券をシャツのポケットに入れたまま洗濯してしまった。

さて、欧州の公共交通機関で高く評価したい点は、利便性を第一に考慮したバリアフリーシステムである。日本のバスでも最近になって一部で実現しつつあるが、当地のバスは全ての路線に標準対応している。乗り物は、構造上タイヤや車輪があり、一定の段差は避けられない。そこでバルセロナのバスは、乗降場所となる歩道の高さと同様の床の高さが一致するよう設計されている。

日本の地方都市ではバス停に一般車両が平然と駐車しており、そのような工夫設計は全く役立たない可能性もあるが、欧米ではバス専用レーン通行規制などが徹底している、という人々のモラ

ル意識が高い。こうした点は我々が大いに学ばなくてはならない点である。

バルセロナでは天候に恵まれた一方、後半のカーディフは連日薄暗く厚い雲に覆われていた。移動はバルセロナからロンドン・ヒースローまで航空便を利用し、国内は鉄道とした。空港からはヒースローエクスプレスでパディントン駅に向かい、パディントン駅からはレディングやブリストルを経由するカーディフ中央駅行きのディーゼル列車に乗った。在来線であるがスピードは145mphと表示されていたので、時速にすれば233km/h、とても速い。ヒースロー空港からは予定どおり、およそ2時間半でカーディフに到着した。

大会では、研究発表時にグラスゴー大学時代の指導教授が聴講に来てくださり、今後の分析の拡張方法について、セッション終了後に話し合う時間を設けてくださった。グラスゴーには3年半住んでいたが、カーディフも雰囲気がとても似ていて、何とも言えない懐かしさがあった。街は全体的に整備されてはいるものの、日中でも所によっては物騒に感じた。カーディフ中央駅とクイーンストリート駅の間に位置する中心部の1つは大きなショッピングモールになっていて、百貨店数件が1つの屋根に収まっていた。まるで1つの町の中を歩いているような巨大なモールであった。

外は灰色の雲に覆われて暗く、冷え込んでもいたので、連日学会後は外出する気になれず、サンドイッチやハーブティーのティーバックを途中のパン屋さんや薬局で調達して過ごした。帰国前には一時天気も回復し、せっかくなので観光案内所を訪ねて美味しいフィッシュ&チップスのお店を紹介していただいた。St. Mary StreetにあるThe Louisというお店で、観光客は誰もおらず地元のお年寄りで賑わっている古いカフェだった。

料理を待っている間は、何故このお店を勧められたのだろうかと感じていたが、いざ頂いてみる

と揚げたてのタラとポテトは今まで口にしたことのない美味しさであった。また訪れることがあれば必ず立ち寄りたいたいと思う。

欧州での2つの学会発表を終え、ロンドン・ヒースロー空港から帰国の途についた。通常は北米路線ではアメリカン航空、欧州路線では英国航空やフィンランド航空を使うが、今回は旅程の都合で初めて日系の航空会社を利用した。機内では子供達が搭乗時から騒いでおり、あいにく満席で他の座席に移動させてもらうことができなかったのだが、客室乗務員さんが周囲の睡眠に入ろうとする乗客に、耳栓をそっと置いてくださった。

この気配りは日本の航空会社ならではのサービスだと感じた。到着前には「少しはお休みできましたでしょうか」、と尋ねてこられたのでお礼をいった。昨今、我が国の多くの産業は、国際標準に見合った簡素化、価格競争に生き残り、と今までにない凄まじい経営環境に直面していることは重々承知であるが、こうした独特の素晴らしさは受け継いでほしいと思った。

バルセロナの公共交通機関のように、我々が見習うべき点が多いことを改めて実感したとともに、帰りの機内の気配りあるサービスのようには、日本ならではの良さも探してみれば数多くある。今後とも自身の継続研究が何らかの形を通じて地域経済政策や空間政策のみならず、本当の豊かさの追求に役立てられることを意識していきたい。

